１９８８年

望月洋史　個展

ぎゃらりぃセンターポイント

望月洋史

　ふと夜半に目覚めることがある　掌の内側には湿り気が付着して横隔膜が胸を圧する刹那摂氏四十度の体温の記憶が去来する
　最早流れを止めることの無為　言いも言われぬ白と黒のコントラスト　そこに潜む静謐　微風のさやけさ　残照
　そんな夜半のしっとり濡れた両の掌に　十年後のタブローに我が身をかけたいと観ずる自己がある